

平成 30 年 9 月 19 日現在

機関番号：11301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K02332

研究課題名(和文) 局地戦争から読み解くアフリカ文学：ボスマンとングギを中心に

研究課題名(英文) British Campaigns in African Literature: Herman Charles Bosman and Ngugi wa Thiong'o

研究代表者

藤田 緑 (Fujita, Midori)

東北大学・国際文化研究科・教授

研究者番号：10219024

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、19世紀以降アフリカ大陸で展開された数多い「局地戦争」のなかでも19世紀末南アフリカで勃発した「ボーア戦争」、ならびに20世紀中葉に東アフリカ英領ケニアで土地奪還から始まり最終的には独立運動へと展開した「マウマウ戦争」に考察の焦点を定めた。その上で、それらの戦争を扱った文学作品を通して、市井の人々にもたらす戦争の惨禍、文化・伝統の破壊、アイデンティティ・クライシス等の実態を詳らかにするものである。その際、二人の作家、戦争に直接かかわった、あるいはほぼ同時代を生きたH. C. ボスマン(南ア)とングギ・ワ・ジオンゴ(ケニア)を中心に検討を加えた。

研究成果の概要(英文)：From the middle of the 19th century onwards, Britain got involved in numerous battles against the local peoples in Africa, in order to defend or push forward the frontiers of the occupied or newly conquered lands. Amongst such British campaigns, this study focuses on the Boer War of 1899-1902 in South Africa and the Mau Mau War in eastern Africa, and explores the ravages of war - destruction of culture and tradition, identity crisis and such - through the works of the two writers, Herman Charles Bosman and Ngugi wa Thiong'o, showing how these wars affect the lives of the ordinary people in the Boer States and Kenya/Kikuyu. Bosman was born in the midst of the 'white man's war', whereas Ngugi spent most of his senior-secondary school days in the conflict which had turned into a civil war.

研究分野：比較文学比較文化

キーワード：大英帝国 脱植民地化 ングギ・ワ・ジオンゴ ハーマン・チャールズ・ボスマン マウマウ戦争 ボーア戦争

1. 研究開始当初の背景

本研究は、拙著『アフリカ「発見」』(岩波書店、2005年)ならびに科研費研究「十八世紀ヨーロッパにおける「異境」をめぐる研究」(基盤研究(C) H15-H17年度、研究分担者)、「文芸におけるアフリカ表象の変容—日欧比較研究」(基盤研究(B)(一般) H18-H20年度、研究代表者)、「十八世紀日欧にみるベニョフスキー「世界周航」の衝撃」(基盤研究(C) H20-H22年度、研究分担者)、「トポスとしてのアビシニア—近代日欧におけるアフリカ認識の変転」(H24-H26年度、研究代表者)の延長線上にある。これらを論考する過程において表出したアフリカでの局地戦争(アビシニア戦争、ボーア戦争、ズールー戦争等)とそれを題材とする文学作品との関係について、たかが局地戦争のはずが西欧世界に与える影響の大きさについて、代表的なボーア戦争とマウマウ戦争に絞って、大学院での講義で取り上げたり、研究会での発表を積み重ねたりするなどして、本研究課題の方向性と実効性、ならびに研究の意義を見定めるに至った。これが研究開始当初の背景である。

2. 研究の目的

本研究は、19世紀以降アフリカ大陸で展開された数多い「局地戦争」のなかでも19世紀末南アフリカで勃発した「ボーア戦争」、ならびに20世紀中葉に東アフリカの英領ケニアで土地奪還から始まり最終的には独立運動へと展開した「マウマウ戦争」を取り上げ、戦争の実相と近代文芸ならびに社会に与えた影響の解明を主たる目的とする。具体的には、それらの戦争に直接かかわった、あるいはほぼ同時代を生きた二人の作家、ハーマン・チャールズ・ボスマン(南ア)とングギ・ワ・ジオンゴ(ケニア)の作品分析を通して、戦争当事者の生活および精神生活、抵抗の軌跡を明らかにし、市井の人々にもたらす戦争の惨禍—文化・伝統の破壊、アイデンティティ・クライシス等の実態を詳らかにする。さらに、両戦争がアフリカ大陸以外の諸地域に与えた影響についても論究する。

3. 研究の方法

本研究は3年計画とし、1年目ではボーア戦争、ならびに英国、ドイツ、日本における当戦争への関与と各国の南アフリカ像を概観した上で、ハーマン・チャールズ・ボスマン研究に着手する。その際、以下の3点を絞る。なお、ここで言う「ボーア戦争」とは1899年から1902年まで繰り広げられた第二次ボーア戦争(第一次ボーア戦争、1880-1881)を指す。英語のボーアに侮蔑的な意味合いがあるため現在ではボーアという名称は使われず、それぞれ第一次、第二次「南アフリカ独立戦争」が一般的であるが、

本研究では当時の呼称をそのまま使用する。ボスマンの経歴を調査し、詳細な年譜を作成すると同時に、作品を渉猟する。ボーア戦争に関する英国側、ボーア側、黒人側の資料の収集と分析を試みる。その際、写真、挿絵、諷刺画等の視覚資料も丹念に収集する。また、ボーア戦争に関する当事国以外の、たとえばオーストラリア、カナダ、インド(英連邦諸国)、ドイツ、オランダ(ボーア出身国)、日本の新聞報道を比較し、当時のボーア戦争の受容を検討する。戦争特派員として南アへ赴いたウィンストン・チャーチルの新聞記事、手記を分析し、ボスマンの作品世界との比較に備える。2年目の前半ではボーア戦争に関わったカラードと「白人同士の戦争」の舞台を提供し、戦闘にも引きずり込まれた、南ア人口の大半を占める黒人の作品を収集する。後半では、「マウマウ戦争」とングギ・ワ・ジオンゴに焦点を当て、ボーア戦争とボスマン同様の研究手順を踏む。すなわち、マウマウ戦争をまず概観するとともに、文献ならびに報道記事の渉猟、宗主国である英国をはじめとしてヨーロッパ(ドイツ)や日本における当戦争との関与やその受容を検討する。そのうえで、ングギの作品分析に着手する。同時に、ボーア戦争がケニアに与えた影響の有無についても検討を加える。最終年である3年目には、戦争下における生活と人々のメンタリティ、ならびに戦争や抵抗の記憶と歴史との関係性を明示し、ボスマン、ングギの作品世界を浮き彫りにする。最後にボスマンとングギの文学世界を世界文学と言う枠組みの中に還元し、アフリカ文学の意義と潜在的な可能性についての考察を目指す。

4. 研究成果

(1) ハーマン・チャールズ・ボスマン(1901-51)は、今でこそ現代南アフリカを代表する作家であり、彼の名を冠した文学賞まであるものの、20世紀中葉においては文学者としての知名度は低く、ましてや、英国では無名に等しかった。彼と同世代の南アで生まれたイギリスの詩人ロイ・キャンベル(1901-57)や、来日経験があり日本を舞台にした作品があることでも知られるイギリスの詩人・小説家ウィリアム・ブルーマー(1903-73)もボスマンを「不世出の短編小説家」と絶賛し、「英国にて〔作品が〕出版されれば、たちまち海外でも評判をとるものを」と、その才能が埋もれたままであるのを惜しんだ。彼の死後、著作権の一部が第三者に渡るといふ不運に見舞われたのと同様、ボスマンの経歴もまた一筋縄では行かない。ボーア人(現アフリカーナー)の両親のもとにケープタウン近郊の町で生まれた彼は、名門大学を卒業し、生粋のボーア人でありながら、ボーア人の真髄をボーア人の母語であるアフリカーンス語ではなく英語で発表し(後に

アフリカンスでも公刊)、教師でありながら義弟を射殺すると言うショッキングな事件を起こす。英語による著作は、ボーア戦争後のイギリス系とボーア系白人の民族融和の一環として南ア自治政府がボーア人学校への英語教育を導入した結果であることが、調査を通して判明した。銃の所持は、彼が大学卒業後に赴任した辺境のボーア戦争の主戦場の一つの中学校で、辺境のボーア人が常に携帯している銃(ライフル)に親しんだことによる。その入手したばかりの銃が殺人の凶器と化したのである。殺人罪により有罪となり、死刑を宣告されるも、刑の執行を猶予され、重労働を伴う10年の禁固刑に軽減、恩赦により3年半で釈放された。その体験は後に半自伝的作品(*Cold Stone Jug, 1947*)として纏められる。釈放後はヨーロッパを9年間放浪、第二次世界大戦勃発により帰国した。ボーア戦争中に生を受けた彼の作品の大半は、ボーア戦争に従軍した、あるいは巻き込まれた辺境に暮らすボーア人からの聞き書きが素材となっており、彼は典型的なボーア人の心情、生活、習慣を何気ない日常生活の描写から紡ぎだした。ボーアの心性を風土に絡めて手際よく浮き彫りにした数多くの短編は、根底にはボーア人への愛情が流れているものの、批判精神にも富んでおり、彼らの営為をどこか茶化したり面白がっている風情が、ボーア人にも非ボーア系(すなわち英国系)南ア人にも受け入れられた最大の要因であると判断される。

(2)前述の通り、ボスマンは今日南アを代表する短編小説家の地位を堅持しているにもかかわらず、研究が等閑に付されている。それは以下の4点に起因するものと考えられる。すなわち、彼が殺人者でありながら特赦による釈放と云う特異な経歴の持ち主である点、彼の存命中に作品が僅か3冊しか刊行されず、生前第一線の作家としての認知、評価がなされなかった点、死後、著作権が南ア国外の第三者に譲渡されたこともあり、全作品の入手は南ア国内以外では困難となり、厳しい研究環境下にあった点、ボーア戦争や戦後のボーア人の生活と民族アイデンティティを主たるテーマとする彼の作品は、複雑な南ア史の知識なしには作品の意図を汲み取りにくい点である。

(3)ボーア戦争は、エドガー・ウォーラス、ジョン・バカン、G.A. ヘンティ、コナン・ドイル、ラドヤド・キプリングなど多くの作家がかかわった戦争でもあった。遠隔の地の戦争であったこともあり、英国本国では反戦の詩なども詠まれはしたが、戦争関連グッズは飛ぶように売れ、ミュージックホールでは募金のための歌が大流行するなどして、一種の文化現象の様相を呈した。また、ボーア軍に包囲されていたマフェキング Mafeking が217日ぶりに解放されたニュースがロンドン

で報道されるや、民衆がピカデリー・サーカスに集まり熱狂的に祝ったことから、お祭り騒ぎをして喜び祝うことを以後マフィック maffick と呼ぶようになった。これもまた、ボーア戦争がイギリス社会に与えた影響の大きさの証左といえる。ちなみに、この騒乱状態のロンドン市中をさまよった日本人がいる。留学のためイギリスに到着したばかりの夏目漱石こと夏目金太郎である。漱石の英国滞在期間はちょうどボーア戦争期と重なる。後に漱石はロンドン時代を身辺雑記風の掌編に仕立てていくつか発表した。そこには「南亜の大統領」の「クルーゲル」に「よく似」た険悪な相貌の大家が登場する。当時のイギリスにおけるボーア人観が反映されたといっても差し支えないだろう。

(4)イギリスは、当初南アフリカの弱小国相手の本戦争を、数か月で決着がつくと楽観視していたものの、結局は2年7か月の長きにわたった。たかが局地戦争のはずが、最終的には兵力45万と戦費2億2200万ポンドを投入、戦争終結3か月前の1902年1月には、「栄光ある孤立」からの政策転換を余儀なくされ、日本との同盟締結に至った。米国にとってのベトナム戦争にも匹敵する損失をイギリスに与えることとなったのである。

(5)大英図書館にてボーア戦争に関する一次資料(新聞、外交記録、手記等、および写真、挿絵、風刺画等の視覚資料)を渉猟するとともにボスマンに関する調査に着手した。さらに、ザグセン州立図書館ではボーア戦争の基礎的文献を、オーストリア国立図書館ではドイツ・オーストリアにおけるボーア戦争の影響に関する文献渉猟、資料調査を実施した。その結果、ドイツではボーアの土着性に対する共感が見られたこと、トランスバル共和国大統領ポール・クリューガーがドイツ系である点が、とりわけドイツ語圏におけるボーア人への深い共鳴を呼んだことが浮き彫りとなった。また、ボーア戦争は外国人義勇兵の多さがその特徴の一つとして挙げられる。この海外からの義勇兵とボーア人の関係をめぐる新たな知見を得た。すなわち、これまで外国からの志願は、徒手空拳のボーアに対する義憤や共感・同情であるとされてきた。この通説に対して、冒険心の発露、アフリカという「場」に対する興味、あるいは自国の体制への不満、ナイーブな理想主義が主たる理由であるとするものである。そのため、彼らは当初こそ好意的に受け入れられたものの、実際にはボーア人からさほど「歓迎」される存在ではなかったのである。

(6)ングギ(グギとも表記)・ワ・ジオンゴは、ここ数年ノーベル文学賞に毎年ノミネートされるなど、世界的に認知された作家である。来日経験もあり、著作の邦訳も他の外国文学との比較にはならないがアフリカ文学のな

かでは珍しく多い。だが、文明批評や長編小説ではなくマウマウ戦争に焦点を定めた短編小説群に関する分析等の研究はなされていないに等しい。本研究で取り上げた彼の作品は、イギリス植民地支配によってキクユ族としての彼の一族が被った、先祖伝来の土地の収奪、言語の剥奪（英語の強制）、伝統文化の否定を告発するものであり、文化が破壊されることによって、あるいはその文化の破壊を食い止めるべく立ち上がったことによって、人々の心と生活に大きな傷跡が残される様子を淡々とした筆致で描き切る。これこそが彼の短編小説群の特徴といえる。ケニアのキクユ族が白人からの土地奪還を標榜して始めたマウマウ戦争は、ケニア人対イギリス人のみならず、ケニア人の中でもキクユ派対反キクユ派、同じキクユ族のなかでもマウマウすなわち反政府側対ロイヤル派と呼ばれる親植民地政府側の捻じれた対立の構図を生み出した。今日にも続くケニア諸民族間の抗争、政治的混乱は、この時の亀裂に淵源を求めることができる。大英図書館においてマウマウ戦争とングギに関する文献渉猟および調査を行った。その成果の一端として、以下の二点が挙げられる。すなわち、ケニア人のアジアでの第二次世界大戦体験もまたマウマウ運動の契機となっていた点、ングギ・ワ・ジオンゴが亡命中にドイツを訪問したことは知られているものの、滞在中に現地の雑誌に作品が掲載されていることが判明した点である。マウマウ戦争に関する先行研究は20世紀後半になってから盛んになり、漸くその全貌が明らかになってきている。本研究を通して、英国・植民地政府側のマウマウ戦争資料とングギの作品とを同時に読み合わせることで始めて炙り出される戦争の実態が白日の下に晒されたといえる。戦争とは無縁だった人々に降りかかった悲劇を「記憶」として淡々と、片や飄々と書き留めたのがングギでありボスマンなのである。そこから戦争の記憶への「赦し」と「癒し」の可能性を読み解くのが現代人に与えられた課題なのではないだろうか。

(7)本研究の学術的特色と独創的な点は、繰り返すが、過去の局地戦争として今日アフリカ史、イギリス史において等閑に付されるボア戦争、マウマウ戦争がいかにアフリカのみならずヨーロッパおよび日本にすら広汎な影響をもたらしたのかを含めて、一次資料と照合しながら文学作品を通して精査・再考するところにある。同時に、日本では無名の、南アの代表的短編作家 H.C.ボスマンを取り上げることで、彼の作品世界を翻訳も含め、広く知らしめるところにも意味が認められよう。同様に、ングギに関しても、日本ではほとんど取り上げられることのない彼の短編小説群に光を当てた。ボスマンとングギ研究に投じた時間が不均衡であったこともあり、ケニアの旧宗主国でありボア戦争の当

事者でもあるイギリス、ボア人国家の成立ならびに東アフリカ支配にも深く関与するドイツ、一見南ア、ケニアとは無縁に映ずる日本と両戦争との関係について考察し、文化的側面に投じるインパクトを明らかにすること、これらを踏まえて最終的に、ボスマンの南アフリカ文学、ングギのケニア（東アフリカ）文学がいかに世界文学の枠組みの中に位置づけられるのかを十分提示するには至らなかった。これらが今後の課題として残されようが、本研究は、比較文学比較文化、アフリカ研究へのささやかな貢献となるのではあるまいか。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計4件）

1. 藤田みどり、余は如何にして劣等人種となりし乎—アフリカン・ディアスポラ、黒人表象研究、アフリカ文学、『比較文学研究』、査読有、第102巻、2017年、18-31頁
2. 佐藤研一、若きレッシングの喜劇『ユダヤ人』—近代ドイツ戯曲の一里塚、国際文化研究科論集、査読有、第24号、2016年、31-42頁
3. 藤田みどり、「高貴な野蛮人」からの訣別—18世紀コミックオペラの黒人奴隷、国際文化研究科論集、査読有、第24号、2016年、1-13頁
4. 佐藤研一、十八世紀ドイツの通俗劇に描かれる異邦人像—アウグスト・フォン・コツェプーを中心にして、国際文化研究科論集、査読有、第23号、2015年、1-18頁

〔学会発表〕（計6件）

1. 藤田みどり、『江漢西遊日記』にみる異人表象—黒坊・紅毛人・唐人、第69回「中東」表象研究会、2017年、仙台
2. 佐藤研一、レッシング作『ラオコーン』に描かれる古代ギリシア像、第91回18世紀ドイツ文学研究会、2017年、東京
3. 藤田みどり、戯ける黒人—18世紀日英文学作品にみる異人表象（1）、第62回中東表象研究会、2016年、仙台
4. 佐藤研一、悲劇『エミーリア・ガロッティ』について、第89回18世紀ドイツ文学研究会、2016年、東京
5. 藤田みどり、正保2年万国総図の人物像—1605/25年ブラウ世界地図との関係を射程に入れて、第56回中東表象研究会、2015年、仙台
6. 佐藤研一、アウグスト・フォン・コツェプーの描く非ヨーロッパ—インド人・太平洋島民・ジャマイカ黒人奴隷、

中東表象研究会、2015年、仙台

6. 研究組織

(1) 研究代表者

藤田 緑 (FUJITA, Midori)
東北大学・大学院国際文化研究科・教授
研究者番号：10219024

(2) 研究分担者

佐藤 研一 (SATO, Ken-ichi)
東北大学・大学院国際文化研究科・教授
研究者番号：80170744